



Title	アイヌ語サハリン方言の証拠性表現：特に伝聞を表す形式 manu について
Author(s)	高橋, 靖以
Citation	津曲敏郎編 = Toshiro Tsumagari ed., 57-61
Issue Date	2009-03-08
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/38299
Type	proceedings
Note	北大文学研究科北方研究教育センター公開シンポジウム「サハリンの言語世界」. 平成20年9月6日. 札幌市
File Information	06takahashi.pdf



[Instructions for use](#)

アイヌ語サハリン方言の証拠性表現：特に伝聞を表す形式 *manu* について

高橋 靖以

(北海道大学大学院 専門研究員)

1. はじめに

アイヌ語サハリン方言には証拠性¹ (evidentiality) に関わる *manu* という形式 (助動詞) がみられる。先行研究によってこの形式は伝聞 (hearsay) を表すものであることが明らかにされている (村崎 1979、田村 1988)。しかしながら、この形式について詳しく検討すると、従来の伝聞という記述のみでは十分に説明することのできない現象がみられる。本稿では主に語り (narrative) のテキストにおける *manu* の用法を再検討し、主としてダイクシス² (deixis) に関わる機能がみられることを指摘する。

今回の分析にあたっては主として Pilsudski (1912) を資料として用いた。同文献にはアイヌ語サハリン方言による 27 編の口承文芸テキストが収録されている。

2. *manu* に関する先行研究

manu に関する初期の言及は Pilsudski (1912) にみられる。Pilsudski (1912: 36) は、*manu* について文や節の末尾に多用される形式であることを指摘している。

金田一 (1914: 29) は叙事詩のテキストに対する注釈のなかで *manu* を「間接なることを述べる語法」として特徴付け、間接証拠という観点からの記述をおこなっている。

一方、知里 (1942: 565-566) は *manu* を第一種の助詞 (助動詞に相当) に分類し、事実の存否を確説する助詞としている³。

村崎 (1979: 59) はこの形式を助動詞に分類し、「伝聞を表す。自分が直接体験した実感ではなく人から聞いて知ったことを述べる」と記述している。また、「*'ucaskoma* <昔話> の文節末によく現れる」と述べ、Pilsudski (1912) と同様の事実を指摘している。

田村 (1988: 44) はこの形式について『〜 (した) そうだ』という伝聞の表現」と記述している。

以上のサハリン方言の先行研究において、*manu* は基本的に証拠性 (間接証拠、伝聞) に関わる形式として記述されているといえる。

3. 証拠性とダイクシスに関する研究

Mushin (2000, 2001) はテキストにおける証拠性とダイクシスに関する研究をおこなっている。Mushin (2000: 938-940) は、Zubin and Hewitt (1995) の研究をふまえ、語りの枠組み (framing) を expressive framing (語りの中の登場人物がダイクシスの中心 (deictic center) となる枠組み) と reportive framing (発話行為の参加者がダイクシスの中心となる枠組み) に分類して

¹ 情報の出所を示す言語カテゴリーをさす (Aikhenvald 2004: 3)。

² 発話状況のパラメータに依存するような語用論的解釈をさす (Zubin and Hewitt 1995: 129)。

³ 知里 (1942) が間接証拠とする記述をおこなっていない理由は不明であるが、5 節で述べるような事例を考慮した可能性も考えられる。

いる⁴。さらにマケドニア語の事例に基づき、これらの枠組みと証拠性に関わる形式の使用が関連していることを示している (Mushin 2000: 940)。

4. manu の基本的特徴

口承文芸テキストにおける manu の用例は以下のようなものである。

- (1) rama sine kotan am manu. ram ohacisuje kotan am manu.
also one village exist VPCL also Empty-House-Devil village exist VPCL
ta cise orun utara ne ampe matajta ne ampe kinta rija kotan
that house of people APCL in winter APCL in the forest winter village
am manu. sakita cise ne ampe oha cise ne an manu. nevan
exist VPCL in summer house APCL empty house CMPCL exist VPCL that
cise-he oxta ohacisuje am manu. (No. 10: 1-4)
house-POSS CMPL Empty-House-Devil exist VPCL

「またある村があった。また空家の化物の村があった。その家の人々には、冬には山手に越冬する村があった。夏には家は空家となる。その家に空家の化物がいた。」

これらの manu の用例は、伝聞の意味を表すという従来の説明と矛盾しないものといえる。また、口承文芸テキストにおいて文の末尾に多用されるという傾向を確認することができる。

5. 1 人称主語と共起する事例

口承文芸テキストにおける manu の用法に関して特徴的であるのは、1 人称主語の文において用いられた例が多数みられることである⁵。

- (2) sine nispa an-ne manu. sine nispa an-ne jke,
one rich man 1SG.SUBJ-COP VPCL one rich man 1SG.SUBJ-COP CONPCL
an-kotan naj an manu. naj an manu jke, kesan pa
1SG.SUBJ-village river exist VPCL river exist VPCL CONPCL every year
cex poronno an manu. cex poronno an manu jke cex
fish many exist VPCL fish many exist VPCL CONPCL fish
an-kojki manu. (No. 22: 1-3)
1SG.SUBJ-catch VPCL

「私はある裕福な男だった。私は裕福な男で、私の村に川があった。川があつて、毎年魚がたくさんいた。魚がたくさんいて、私は魚を捕った。」

⁴ Mushin (2000: 940)は両者は連続的な性格をもつものであるとしている。

⁵ 1 人称主語と manu が共起する事例は、金田一 (1914)、村崎 (1976) などサハリン方言の他のテキストにおいてもみられる。

- (3) e, jajvente kuxpu an-ujna manu, an-ekux kuru, e, ekasi ikajufpo
 poor girdle 1SG.SUBJ-take VPCL 1SG.SUBJ-gird ancestor quiver
 es an-ujna manu, e, ekas kupo an-ujna manu.
 APCL 1SG.SUBJ-take VPCL ancestor bow 1SG.SUBJ-take VPCL
 asip-an manu jke kimojki tojru kata makap-an manu.
 go out-1SG.SUBJ VPCL CONPCL hunt path CMPCL go-1SG.SUBJ VPCL
 (No. 18: 17-19)

「私はぼろぼろの帯を取り、帯を締め、先祖の矢筒を取り出し、先祖の弓を取り出した。私は外に出て、狩に行く路へ出た。」

このように *manu* が 1 人称主語の文において用いられるという事実は、この形式が伝聞(他者からの言語情報を情報源とする)を表すとされることと必ずしも整合するものとはいえない。しかしながら従来の研究においてこの現象に関する説明はみられない。次節ではこの現象に関して考察する。

6. テキストにおける *manu* の機能

上記の 1 人称主語において用いられる事例は、テキストにおける *manu* の機能を「発話行為の参与者、発話時点、発話現場」というダイクシス上の基準点を示すもの (Mushin 2000 の *reportive framing*) と規定することにより説明しようと考えられる⁶。すなわち、口承文芸テキストの 1 人称主語 (Mushin 2000 の *expressive framing* に該当) と *manu* との間にダイクシスに関わる差異が存在するとみることで、伝聞形式が 1 人称主語と頻繁に共起するという現象を無理なく説明することができる。

この説明を支持するものとして、語り手自身の体験談を語るテキスト (山辺 1912) において 1 人称主語と *manu* の共起は原則みられないことがあげられる⁷。以下に用例を示す。

- (4) アノカ 子アンペ ナー ポン ヘカチ アン 子ー クス モンライケ
 anoka neanpe naa pon hekaci an- nee kusu monrayke
 1SG.PRON APCL still little child 1SG.SUBJ-COP CONPCL work
 アン コヤークシ クス ネーランペ カ アネラミシカリ
 an- koyaakus kusu neeranpe ka an-eramiskari
 1SG.SUBJ-cannot CONPCL something APCL 1SG.SUBJ-don't know
 ヤイ ヘーチリ パテ アン キー (山辺 1912: 8)
 yayheeciri pate an-kii
 play APCL 1SG.SUBJ-do

「私はまだ小さい子供であったから仕事も出来ず何も知らずにただ遊んでばかりい

⁶ 引用文中に *manu* が出現する場合に関しては、ここでは考察の対象外とする。

⁷ これは必ずしも発話者の 1 人称主語と *manu* の共起が常に不可能であることを意味するものではない。ある種の限定された語用論的条件の下では、発話者の 1 人称主語と *manu* の共起も可能な場合がありえるであろう。

た。」

語り手自身の体験談における1人称主語は発話者自身に関わるものであり、上記の口承文芸テキストのような発話者と異なる物語世界の登場人物に関わるものではない。従って同じく発話者に関与する伝聞形式である *manu* と語用論的な理由から共起しにくいのではないかと考えられる。

7. 他の形式との比較

manu と同じく伝聞に関わるものとして、Pilsudski (1912: 128)には *hauhe an* という形式があげられている。下記の例では、*hauhe an* によって示される伝聞情報は物語りの中の登場人物（1人称主語）に関与するものと解釈しうる可能性がある。また、テキストにおいて文や節の末尾に出現する頻度は *manu* に比べ高くない。

(5) inu-an ike, etokota kane ene kane an-ki hi
listen-1SG.SUBJ CONPCL before APCL such APCL 1SG.SUBJ-do NOM
ne kane ki hauhe an-nu. tani ne ampe tekoro pirikahno
COP CONPCL do voice 1SG.SUBJ-hear now APCL very well
utar okaj, *hauhe an.* ner ampe sokaene erampotara ham an-ki
people exist FPCL something after worry about not 1SG.SUBJ-do
no okaj-an. (No. 12: 201-203)
CONPCL exist-1SG.SUBJ

「私が聞くところによると、(子孫は) 昔に私がしたようにして暮らしているという。人々は今は裕福に暮らしているという。私は何も心配せずに(あの世で) 暮らしている。」

従って、*hauhe an* と *manu* はダイクシスに関して性質の異なる形式と規定しうる可能性があり、今後この点をさらに検証する必要がある。

8. おわりに

本稿ではアイヌ語サハリン方言の証拠性を示す形式 *manu* について、主に口承文芸テキストにおける用例に基づき、ダイクシスに関わる機能がみられることを述べた。また、類似した意味を有する形式の記述においても、ダイクシスに関わる側面を考慮する必要があることを指摘した。従来の研究において、証拠性を示す形式は証拠性の枠内でのみ記述されてきたが、ダイクシスを含め様々な角度から研究をおこなう必要があるといえる。

付記

本稿は北海道大学大学院文学研究科公開シンポジウム「サハリンの言語世界」(2008年9月6日)における研究発表に基づくものである。その際御意見を頂いた諸先生方に深く感謝申し上げる。

略号

1: first person APCL: adverbial particle CMPCL: case marking particle CONPCL: conjunctive particle COP: copula FPCL: final particle NOM: nominalizer POSS: possessive PRON: pronoun SG: singular SUBJ: subjective VPCL: verbal particle

参考文献

- Aikhenvald, A. Y. (2004) *Evidentiality*. Oxford: Oxford University Press.
- 知里真志保 (1942) 「アイヌ語法研究」『樺太庁博物館報告』4(4). 豊原: 樺太庁博物館 (『知里真志保著作集』第3巻, 平凡社, 東京, 1973 所収) .
- 金田一京助 (1914) 『北蝦夷古語遺篇』東京: 郷土研究社.
- 村崎恭子 (1976) 『カラフトアイヌ語』東京: 国書刊行会.
- _____ (1979) 『カラフトアイヌ語—文法篇—』東京: 国書刊行会.
- Mushin, I. (2000) Evidentiality and deixis in narrative retelling. *Journal of Pragmatics* 32: 927-957.
- _____ (2001) *Evidentiality and Epistemological Stance: Narrative retelling*. Amsterdam: John Benjamins.
- Pilsudski, B. (1912) *Materials for the Study of the Ainu Language and Folklore*. Cracow.
- 田村すず子 (1988) 「アイヌ語」亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) 『言語学大辞典』1: 6-94. 東京: 三省堂.
- 山辺安之助 (1912) 『あいぬ物語』東京: 博文館.
- Zubin, D. A. and L. E. Hewitt (1995) The deictic center: A theory of deixis in narrative. In: J. F. Duchan, G. A. Bruder and L. E. Hewitt (eds.) *Deixis in Narrative: A Cognitive Science Approach*, 129-155. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.

Evidentiality in the Sakhalin Dialect of Ainu: the Analysis of the Hearsay Particle *manu*

Yasushige TAKAHASHI
(Research fellow, Hokkaido University)

In this paper I describe the characteristics of the hearsay particle *manu* in the Sakhalin dialect of Ainu. I mainly point out the deictic function of *manu* in narrative texts.